

# 日本美術専門家会議

2023年2月10日(金)

# 2023年2月10日(金) 日本美術専門家会議

## 趣旨

東京国立博物館創立150年の節目の年に、これまでの当館と海外のミュージアムとの間での交流を踏まえながら、今後の人的交流や学术交流をさらに深める可能性について検討した。また、現在博物館界が抱えている多様性と社会的包摂の問題について意見交換を行うとともに、多様な視点から見る日本文化・日本美術をどう語るかを話し合った。

**会場：**オンライン開催

**議長兼進行：**松嶋 雅人 東京国立博物館 学芸研究部調査研究課長

## 出席者

北米：14名、欧州：14名、アジア・オセアニア：3名、日本：28名

## 会議概要

本年は当館創立150年にあたり、様々な周年事業を展開しているため、例年開催の国際シンポジウムは行わず、専門家会議のみオンラインにて実施した。時差がある中で世界各地をつなぐ会議となったため、会議時間は短時間であったが、貴重な情報交換ができた。

会議では、下記2議題について各3分程度の問題提起の発表があり、続いて討議・情報交換が行われた。

## 議題1. 「東博150年によせて」

**話題提供：**東京国立博物館 学芸企画部企画課国際交流室長 楊 鋭

## 問題提起

東京国立博物館はこれまで展覧会交流をはじめ、海外のミュージアムと様々な形で良好な協力関係を構築してきた。2022年は東京国立博物館創立150年にあたり、記念式典に際しては海外のミュージアムからも多くの祝賀メッセージをいただいた。その中には、今後の連携と交流に大いに期待するメッセージが多かった。日本美術に関わる交流に関して、独立行政法人国立文化財機構および東京国立博物館はこれまで、国際シンポジウム、専門家会議、ワークショップ等を通して、海外のミュージアムに在籍する日本美術を担当する学芸員等のネットワーク作りや交流を深める日本美術専門家連携・交流事業を実施してきた。東京国立博物館創立150年を機に、いま一度現在の交流体制を確認し、当館の日本美術担当者との人的交流や学术交流の更なる可能性、そして当館に期待することなどについて意見交換を行いたい。

## 発言内容

- ・日本の研究者と海外の日本美術研究者の間で連携企画、共同研究プロジェクトなど、様々なテーマで実施する可能性がある。コロナ禍で停止していた関連交流事業を再開したい。
- ・作品の取り扱いについて日本のやり方を理解、習得できるような、対面式のワークショップを希望する。
- ・作品の貸借を伴う海外展など、様々なことで協力できる関係作りや、日本美術を中心に、日本の文化を世界に理解してもらう機会を作りたい。
- ・対面という形で交流を深めたい。

## 議題 2. 「博物館における多様性・社会的包摂と学芸業務への影響」

話題提供：ボストン美術館 ウィリアム・アンド・ヘレン・パウンズ主任学芸員(日本美術)  
アン・ニシムラ・モース氏

### 問題提起

多様性と社会的包摂の推進を目指すボストン美術館の取り組みがモース氏により紹介された。2022年の夏に公開されたその取り組みは、その4年以上前に始動し試行錯誤を重ねてまとめられたものであった。初期の段階では、同館の職員や評議員が社会的包摂、多様性、エクイティ、アクセシビリティを推進するための方策を練った。モース氏は、これらの用語を次のように定義した。

- ・多様性 人種・民族・性別・性的指向・宗教・年齢の違いを尊重すること
- ・エクイティ すべての人々(特に少数派の人々)に利用する権利と機会を保証すること
- ・社会的包摂 多様な背景を持つ人々を歓迎すること
- ・アクセシビリティ 身体的に困難を抱える人々に利用しやすい環境を整えること

### 発言内容

博物館における社会的包摂の推進は、ボストン美術館をはじめとした多くの館において次のような方策を通して議論されてきた。

- ・博物館 / 美術館を脱植民地化し、主要な文化的集団の視点を超えて観点を広げること
- ・学術的規範を解体し、いわゆる「巨匠」による作品を今後は特別扱いしないこと
- ・より幅広い作品や芸術家を取り上げること
- ・先住民の人々が自分たちの文化に関わる展示に携わることができるよう、彼らの声を取り入れること
- ・最も権威あるリーダーとしてではなく、チームの一構成員として担当キュレーターが携わること
- ・多様な背景を持つ新たな世代の学生が博物館 / 美術館でキャリア形成できるよう支援すること

最後に、モース氏は多様性と社会的包摂の推進が提示した数々の課題や疑問について言及した。

- ・今日の博物館 / 美術館における日本美術のキュレーターの役割とは何か。
- ・アメリカにおいて、東洋美術とは異なるアジア系アメリカ人による作品をどう展示できるか。
- ・博物館 / 美術館への新たな来館者が現代美術をより身近に感じているなか、古い時代の日本美術に興味を持ち続けてもらうためにキュレーターとして何ができるか。
- ・キュレーターとしてどういった社会問題に取り組むべきか。

発表後の自由討論では次のような点について議論された。

- ・インターンシップ、雇用、資金に係る問題
- ・日本美術に携わる職員の多様化
- ・学術的規範を解体し展示内容を多様化することの利点
- ・東京国立博物館において社会的包摂推進のために取りうる手段
- ・簡潔で伝わりやすい作品解説執筆の難しさ
- ・美術史学的研究に深く根差した展覧会の価値と需要